平川市男女共同参画情報誌

きあらひらかわ

互いに認め、支えあう、男女（ひと）がきらめく平川市

第８号　平成２３年９月１日発行

子どもたちに教えていますか？　古くからの知恵や遊びは受け継いでいきたいものです。（写真は「昭和の生活体験学習事業」より）

被災地の復興にも男女共同参画の視点による取組みを

東日本大震災から約半年が過ぎ、多くの方々が復興・復旧に向けて、日々取り組んでおります。一日も早い復興を願うとともに、避難所や仮設住宅等で生活している被災者の安全の確保や男女のニーズの違いなど、その取り組みにも男女共同参画の視点による配慮が必要です。

平川市では、被災地への支援物資・義援金のほか、市職員の派遣などによる被災地支援に取り組んでいます。

「きあら（chiara）」はイタリア語で「光り輝くもの」「よろこびをもたらすもの」を意味します。平川市男女共同参画推進プランの基本理念である「互いに認め、支えあう、男女（ひと）がきらめく平川市」のとおり、輝く未来を見つめながら性別にかかわらず一人ひとりがお互いを認め、自分らしさを十分に生かせる平川市をめざしたいという願いを込めています。

東日本大震災　被災地での仕事

～　平川市から被災地へ　保健師の活動　～

保健師の被災地支援の要請があり、４月１８日から２２日までの５日間、宮城県名取市の避難所へ行ってきました。

避難所となっている中学校の体育館には、閃上（ゆりあげ）地区という海岸沿いの町から約１５０人の方が避難され、段ボールで仕切られただけのスペースで生活していました。家も流され、家族とも離れ、想像を絶するような困難にあった方たちですが、避難所には笑顔もあり、それぞれが炊き出しや掃除、相談相手などの役割を担い、助けあっている姿が強く印象に残りました。

服薬や入浴のお手伝い、健康相談などを通じてのわずか５日間の出逢いでしたが、ふと、今ごろどうしているのかと思い出す方たちがいます。

名取市の避難所（名取第一中学校第１体育館）

○夫の死を自分のせいだと責め続けていた女性

夫と一緒に逃げたものの、夫は体の不自由な妻を避難させ、「自分は大丈夫」と言い残し、家に戻った後で津波にあい、帰らぬ人となってしまったそうです。彼女は『あの時どうして「一緒に逃げよう」と言わなかったのか』と悔やみ、自分を責め続けていましたが、先日、ご遺体が見つかったということで「これできっとお父さんも許してくれるだろう」と気持ちに区切りをつけ、前を見始めようとしている姿が印象的でした。

○周りの面倒をよくみて、私にも娘のようによく話しかけてくれた男性

「何事も受け止め方次第。笑顔が大事」と周囲を明るく励まし、自分が助けたという高齢のご夫婦の世話をよくしていました。家は地区で最初に流され、自身も流されたそうです。私に見せてくれた住民票からは奥さんと娘さんとの三人暮らしのようでしたが、避難所にはお二人の姿はありませんでした。明るく振る舞いながらも、時折、言葉につまり、遠くを見つめる姿に何も尋ねることができませんでした。

○家族や親せきの四十九日の相談をしながら、「私たち一体何やってるんだろうね」としみじみと話している若い娘さん二人。

○病院が流されながらも避難所を回って診察を続ける医師や自身も被災しながら高齢者の相談に駆け回っているケアマネージャーさん、ボランティアで毎日のように来てくれている看護師さん・・・

これから先も、さまざまな困難が待っているだろうと思いますが、支え合って乗り越えてほしいと願わずにはいられません。

被災地から帰ってきた当初は当たり前の毎日をとても大切に感じていましたが、日が経つにつれ、そんな気持ちも薄らいできた頃にちょうどこの記事のお話をいただき、改めて、平穏な毎日と身近な人を大切にして生きて行こうと思っています。　　（福祉課　高齢障害支援係　保健師　佐藤）

被災地支援のために節電・省エネを！

現在、日本の電力は、その７割を火力発電に頼っています。火力発電はその燃料として石油・石炭・天然ガスなどを使用していますが、脱・原子力発電への傾向が強まれば、ますます火力発電による燃料の消費が増え、燃料不足に陥って、被災地復興への妨げとなる可能性があります。

被災地支援のため、節電・省エネに心がけましょう！

ありがとう　交わす一言　家事・育児

活気ある　町会、男女で　共同作業

仕事・家事　あゆむ人生　ささえあい

ライフスタイルを自由に選べる社会

少子・高齢化が叫ばれてだいぶ経ちますが、これと合わせて、家族の形も変わってきています。核家族、共働き世帯の増加や未婚・離婚の増加、一人世帯の増加など、いろいろな家族の形があって、それぞれのライフスタイルもまた様々になってきました。

自分でその生き方を選んだ人、選択の余地なく今のライフスタイルでいる人、いろいろな人がいると思われますが、男女ともに自分のライフスタイルを自由に選択できる社会を実現するため、今現在の制度や慣行を見直すことも男女共同参画の取り組みのひとつです

新たな発想を取り入れて暮らしやすい社会に

男性も女性も様々な生き方がある中で、それぞれの地域や職場などにおいて、色々な人の考え方や能力を生かし、その活動に活力があるものとしていくためには、色々な視点で考え、新たな発想を取り入れることが必要となってきます。

例えば、町会、社会教育団体や学校、企業のほか国、県、市町村などあらゆる分野において、今後の方針や政策を決定する場において、性別・年齢にとらわれず、様々な人の考え方を取り入れることが重要となってきます。

さまざまな家族のかたち・ライフスタイル

～ 女性の活躍で地域に活力を ～

女性の参画拡大に向けて

国では、「社会のあらゆる分野において、2020 年までに、指導的地位に女性の占める割合が、少なくとも 30%程度に」という目標を掲げ、民間に先行して積極的に女性の登用を進めています。

国はこの目標を達成するため、政党、都道府県や各種団体等へ「ポジティブ・アクション」の導入を要請しており、その取り組みとして「クオータ制」の導入などを検討しています。

平川市においては、市に附属する各種委員会等において、女性委員の構成比率 30%以上を目標としています。（平成 23 年４月１日現在で約 24%）

女性の登用の推進は、国が先導して取り組んでいますが、民間の企業や団体などにおいても積極的に取り入れてもらうよう検討を始めています。

みなさんが所属する会社、団体などにおいても、活力のある活動を持続するために考えてみてはいかがでしょうか。

「ポジティブ・アクション」「クオータ制」とは？

「ポジティブ・アクション」（積極的改善措置）とは、機会における男女間の格差をなくすために、必要な範囲で男女のどちらかを優遇する措置を取ること。その手法の一つとして「クオータ（割り当て）制」があり、性別を基準に一定の人数や比率を割り当てること。例えば、ノルウェーの男女平等法では、公的機関の委員会を任命する時はそれぞれの性が構成員の 40 %以上選出されなければならない、としています。

みんなでつなごう

ひらかわ リレーコラム

第４回

このコーナーは、いろんな方に、男女共同参画について日頃の思いを書きつづっていただこうという企画です。

平川市男女共同参画推進会議委員　**葛西　康人**（光城・平川市商工会青年部長）

私はこの度推進会議委員になったことをきっかけに男女共同参画社会について勉強させて頂きましたので、男女共同参画についての考えを述べさせていただきます。

男女共同参画に関してインターネットで調べたところ、日本は職業上の地位という点で、管理職に占める女性の割合は 10.1%と、アメリカ 42.1%、ドイツ 35.2%、スウェーデン 31.7%など他国に比べて大きな差があります。日本では女性の社会進出はまだまだ進んでいないのが分かります。

私は地域によって女性の職場内における待遇等に格差があると感じています。仕事をこなして役職をつけてバンバン前に突き進む女性がもっといてもいいのではないでしょうか。女性だからと言ってキャリアやスキルがあっても認められない社会は、男女平等ではないと考えます。そのような労働社会は若年層労働者の県外流出→人口の減少→少子高齢化と負のスパイラルを進めることとなり、結果的に地域にとって大きくマイナスに働きます。もっと女性が活躍できるような社会になれば日本も大きく変わる気がします。

「夫が外で働き、妻は家庭を守る」という伝統的な男女の役割分担が長い間“当たり前のこと”とされてきた日本の社会ですが、近年は男性と同じようにバリバリ働き、結婚後も子育てと両立させながらキャリアを重ねていく女性も特別な存在ではなくなりました。

ここで気にかかるのは女性が社会で活躍する機会が増えたことで、晩婚化が進んでいることです。女性も男性も平等に育児に参加し、仕事も両立できる環境にあれば、晩婚化の傾向は減ると予想されています。晩婚化と同様に少子化も進めば、将来の日本を背負う子ども達の負担が大きくなることを忘れてはいけません。

最近は『コンカツ（婚活）』『イクメン（育児を積極的に行う男性）』など時代の変化を象徴する言葉をよく耳にします。今までは産休による出産後、女性が引き続き育児を行うのが一般的でしたが、現在では、給料の一部を育児休業給付金から受け取り、育児休暇をとって積極的に育児を行う男性が増えてきました。しかし休暇をとって育児をしたいと思っている男性は多いものの、収入が下がる、会社の評価が低くなるといった理由から、まだまだ日本における事実上のイクメンの数は少ないのが現状です。

この現状を少しずつでも変えていく取組みは必要だと感じています。男性が育児・家事をこなすという事で夫婦のバランスがとれている家庭も多くなってきていますし、何よりも子どもにとって父親とのコミュニケーションの時間が多くとれる事は素晴らしい事だと思います。

若年、晩年にかかわらず離婚率も高くなって、一人親の家庭の割合が高くなりつつある今、この問題を前向きに捉えてもっと深く話し合う時だと感じています。

最後に、東日本大震災に直面して孤独感にさいなまれ、人との絆を持ちたいと生涯のパートナーを得ようとする人が増えたと聞きました。津波によって多くの尊い命が奪われ、家屋が流され、夢も希望も失った人達が今必死になって生きている。その中で人と人は支えあいながら生きていくという事、男性と女性が共に生き、共にいい社会を作っていくという事はとても大切な事。そして今回の大震災は『生きる』という意味を見つめ直す機会になったのでは･･･と感じました。

○あなたの「男女共同参画川柳」を募集しています！

応募していただいた作品は「きあらひらかわ」の紙面で紹介します。応募先は次のとおりです。

〒036-0104　平川市柏木町藤山 25-6　平川市役所　総務部総務課行政改革係

TEL0172-44-1111（内線 1353）メール gyoukaku@city.hirakawa.lg.jp